

教科書にもよく採用される話。また、保昌は道長の紹介で和泉式部と結婚している。四位の貴族。武勇に秀でていたという。

昔、袴垂<sup>はかまたれ</sup>とていみじき盗人の大将軍ありけり。十月ばかりに衣<sup>きぬ</sup>の用ありければ、衣少<sup>きぬ</sup>しまうけんとして、さるべき所々窺<sup>うかが</sup>ひ歩きけるに、夜中ばかりに人皆しづまり果てて後<sup>のち</sup>、月の朧<sup>おぼろ</sup>なるに、衣<sup>きぬ</sup>あまた着たりけるぬしの、差貫<sup>さしぬき</sup>の稜<sup>とぎま</sup>狭<sup>せま</sup>ばみてきぬの狩衣<sup>かりぎぬ</sup>めきたる着て、ただ一人<sup>ひとり</sup>笛吹きて行きもやらで練<sup>ね</sup>り行<sup>ゆ</sup>けば、<sup>2</sup>「あはれ、これこそ我に衣得させんとて出でたる人なめり」と思ひて、走りかかりて衣を剥<sup>は</sup>がんと思ふに、あやしく物の恐ろしく覚えければ、添<sup>そ</sup>ひて二三町ばかり行けども、我に人こそ付きたれと思ひたる気色<sup>けしき</sup>もなし。いよいよ笛を吹きて行けば、試<sup>し</sup>みんと思ひて、足を高くして走り寄りたるに、笛を吹きながら見かへりたる気色、取りかかるべくも覚えざりければ、走り退きぬ。

かやうにあまたたび、とぎまかやうぎまにするに、露<sup>つゆ</sup>ばかりも騒ぎたる気色なし。「希<sup>け</sup>有<sup>う</sup>の人かな」と思ひて、十余町ばかり具<sup>ぐ</sup>して行く。「さりてあらんやは」と思ひて刀を抜きて走りかかりたる時に、その度<sup>たび</sup>笛を吹きやみて立ち返りて、「こは何者ぞ」と問ふに、心も失<sup>う</sup>せて、われにもあらでつゝいゝられぬ。<sup>3</sup>また、「いかなる者ぞ」と問へば、「今は逃ぐともよも逃がさじ」と覚えければ、「引剥<sup>は</sup>ぎに候<sup>まう</sup>ふ」といへば、「何者ぞ」と問へば、「字袴<sup>あざはか</sup>垂<sup>かたまたれ</sup>となんいはれ候ふ」と答ふれば、「さいふ者ありと聞くぞ。危<sup>あやぶ</sup>げに希有のやつかな」といひて、「ともにもうで来<sup>こ</sup>」とばかりいひかけて、また同じやうに笛吹きて行く。この人の気色、「今は逃ぐともよも逃がさじ」と覚えければ、鬼に神取られたるやうにて共に行く程に、家に行き着きぬ。いづこぞと思へば、摂津前司保昌<sup>やすま</sup>といふ人なりけり。家の内に呼び入れて、綿厚<sup>わたあ</sup>き衣<sup>きぬ</sup>一つ賜りて、「衣<sup>きぬ</sup>の用あらん時は参りて申せ。心も知らざらん人に取りかかりて、汝<sup>なれ</sup>過<sup>す</sup>ちすな」とありしこそあさましく、むくつけく、恐ろしかりしか。いみじかりし人の有様なり。捕へられて後語りける。

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べる。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。駒大テキスト使用

2 平安常識的には貴族はお供を連れて歩くのが普通。ましてや夜。

3 突き居る正座。當時あぐらが普通だったが、膝をついて座るのはかしこまった座り方